

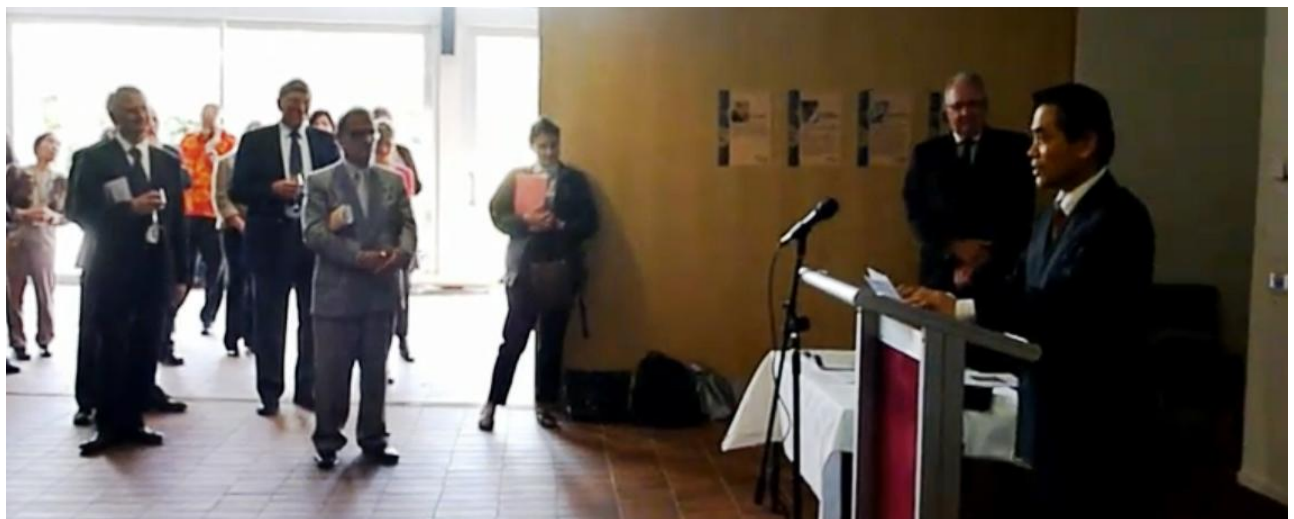
40 周年記念行事特別号

Dr.川瀬記念銘板除幕式と第 223 回例会の報告

さる 10 月 20 日、当協会の 40 周年記念行事のハイライトのひとつであるリンカーン大学への Dr.川瀬記念銘板の寄贈・除幕式が盛大に行われました。この行事を長く記憶にとどめるため、本特別号を編集し、会員の皆様へお届けします。



日本大使館河合祥一クライストチャーチ領事による序幕



事務局: 〒530-0028 大阪市北区万歳町 3-41 城野ビル 201
電話: (06) 6367 1773 FAX: (06) 6367 1793 makltd@d1.dion.ne.jp
ホームページ www.nzsocietykansai.com



リンカーン大学学長
ロジャーフィールド博士のスピーチ



日本 NZ 協会（関西）
呉橋 真人会長のスピーチ



川瀬勇博士親族代表
藤村 琇子さんのスピーチ



除幕後の記念撮影



第 223 例会にお集まりいただいた皆様

式典と旅の思い出



リンカーン
大学からの
プレゼント



若き日の川瀬博士



ロジャーフィールド
学長
藤村さん
河合領事



名誉学長 Tom Lambie さんのご挨拶を受ける藤村さん



てぬぐいプレゼント



「てぬぐいプレゼント」レディー-s



メモリアル
ホール
再建の献
金をしま
した。



献金にキャッシュが入っていて大騒ぎ



カンタベリー博物館見学ツアー



Dr.川瀬の寄宿舍の前で川瀬家一同



図書館の中の Dr.川瀬の特別展示



若き Dr.川瀬と同じ場所で記念撮影



重責から解放された呉橋会長！



すべてを終わってスーさんの家で BBQ



ありがとうハンドルビー&ヒューム一家！

リンカーン大学 学長
ロジャー・フィールド教授のスピーチ

河合祥一日本領事、名誉学長トム・ラムビー、藤村琇子様と川瀬博士ご家族、日本ニュージーランド協会（関西）代表、呉橋真人様、ディスティンググット・ゲスツ、リンカーン大学関係者の皆様、レディーズ・ジェントルマン、ナイトファー族の神聖なる土地への歓迎をします。（マオリ語）

ようこそ、リンカーン大学出身者川瀬勇博士の生涯と業績を記念する特別の機会に。

川瀬勇は1931年10月から1933年12月まで、当時カンタベリー農科大学だったリンカーン大学の学生でした。2年少しの間の学生でしたが、彼の大学との友情と連帯はほぼ70年に渡りました。それは単にリンカーン大学に留まらず、クライストチャーチ、そしてニュージーランドとの連帯でした。それを、本日これから私たちは記念銘板の序幕で記念しようとしています。

川瀬博士の生涯はお持ちの経歴パンフレットに要約してあります。彼の農学者としての業績、牧草地研究機関の創立、日本ニュージーランド協会の設立、クライストチャーチでの日本祭（複数）、女王功労賞受勲について記載してありますが、いくつか重要なポイントについて触れたいと思います。

リンカーン大学は国際プログラムを重要視しております。ここで学ぶ留学生と相当数の海外教育研究機関との連携の両面の国際性がわが大学の教育と研究を支えています。

カンタベリー農科大学が1930年に日本の学生から受取った入学願書は大きな関心と呼んだに違いありません。そして、当時の学長アレクサンダー教授はこの願書を受け入れるように大学委員会へ勧告したことでしょう。80年前、川瀬博士はニュージーランドへの留学生のパイオニアの一人だったのです。

川瀬博士は現在のリンカーン大学と非常に長い期間関係がありました。彼がこの大学の伝説の一部となっていることは不思議ではありません。彼と会ったことのある人、彼を知っていた人、彼と仕事をした人、一人一人が彼に関する逸話を持っています。彼らは一様に、川瀬博士の魅力、ユーモア、知恵、生きる意欲を思い出します。

私の好きな話の一つに彼が最後にリンカーン大学を訪れた際のエピソードがあります。それは彼の楽観性と生への意欲を物語るものです。彼はリンカーン大学ボールペンを所持しており、キャンパス文房具店に、替え芯を求めて寄りました。カウンターの女性たちは、誰もがそうであるように彼に魅了され、なんとか替え芯を用意しました。

（近頃、替え芯は普通売っていないので 訳者注）彼は彼女たちに感謝し、一瞬沈黙した後、クライストチャーチ滞在中にもう1本替え芯を買いに来なくちゃと言いました。彼が、替え芯を口実に、もう一度リンカーンへ来ることを楽しみにしていたことは明らかです。残念ながら、運命はそれを許しませんでした。その1日後、彼は天国へ旅立ったのです。

アイビーホールのジョージ・フォーベス図書館には川瀬コレクションがあります。それは何十年にもわたり彼から図書館へ寄贈された彼の著書数冊と直筆数点から成っています。その中には、「日本の野草地」「牧草学講義」、そして有名な日本人旅行者のためのニュージーランドガイドブックがあります。彼の手書きの手記は2点あります。1938年川瀬博士は川瀬牧草研究所発行の彼の最初の2冊の学術研究本を母校へ寄贈しました。これはたいへん貴重なコレクションであり、我々が所蔵していることを喜ばしく思うものです。

川瀬博士に関係した広範な人々が集う今日の集まりは、この人物に新たな伝説を加えることになります。ここに、彼が学生時代によく知っていたメモリアルホールに埋め込む準備が整った、彼の生涯を称える銘板があります。ところが残念ながら、ご覧の通り、メモリアルホールは最近の地震でひどく損傷し、今は立ち入り禁止です。

自然が私たちの計画をひっくり返してしまいました！いかにも象徴的で的を得ていると思いませんか？川瀬博士は自然とその力に深く敬意を払う文化の国からやってきたのです。ですから、銘板を安置すべきメモリアルホールが現在使用不可能というこの窮状を彼はとても良く理解してくれているかのように感じます。といって、この窮状がこの行事の意義と重要性をそこなうものでは決してありません。

このお祝いの実行と銘板の作成には川瀬博士のご家族と現在の日本ニュージーランド協会（関西）の会長、呉橋真人氏、彼を知る多くのニュージーランドの友人にとってはMak、に負うところ大きいものがあります。Makと協会はメモリアルホールの再建への財政的寄付で、大学への厚意を示してくれました。大学を代表して私は、もし川瀬博士がここにいたら、疑いもなく彼自身が考え

たところのこの厚意と行い、そして添え書きに感謝いたします。

リンカーン大学の傑出した卒業生である川瀬博士を称えるため、ここに集った皆様、ありがとうございました。

原文：

**Speech by Professor Roger Field,
the vice chancellor, Lincoln University**

Kia koutou nga manawhenua
Ngai Tahu o tenei rohe
Tena koutou katoa

- Shoichi Kawai , Honorary Consul of Japan
- Chancellor, Tom Lambie
- Shuku Fujimura and Dr Kawase' s family members
- Makoto Kurehashi, Chairperson of the New Zealand Society of Japan, Kansai
- Distinguished guests
- Friends of Lincoln University
- Ladies and Gentlemen

Welcome to this special occasion to commemorate the life and service of Lincoln University alumnus, Dr Isamu Kawase.

Isamu Kawase was a student at Lincoln University, then Canterbury Agricultural College, from October 1931 to December 1933. While a student for a little over two years his friendship and association with the institution spans almost 70 years in total. It is the association, not only with Lincoln University, but with Christchurch and New Zealand, that we are commemorating today with the unveiling of the plaque.

The details of Dr Kawase' s life are outlined in the biographical pamphlet which you have. His career as an agronomist, the founding of grassland research organisations, the founding of the New Zealand Society of Japan, the Festivals of Japan in Christchurch, and the award of a Queen' s Service Order – they are all recognised and explained in some in some detail. I would, however, like to touch on some important points.

We make a feature of this University' s international programme, both in terms of the international students on campus and the significant number of international institutional relationships that support both education and research.

When Canterbury Agricultural College received an application from a Japanese student in 1930 it created significant interest and I understand that the then College Director, Professor Alexander, referred the matter to the College Board before agreeing to support the application. Isamu Kawase was a real pioneer as an international student in New Zealand 80 years ago

Dr Kawase was connected with Lincoln University, as it is now, over a very long period of time. It is not surprising that he became part of the folklore of the place. Everyone who ever met him, knew him, or worked with him has their story. They recall his charm, his humour, his wisdom and his zest for life.

One story I like which illustrates his optimism and enthusiasm for life comes from his last visit to Lincoln University. He had with him a Lincoln University ballpoint pen and called into the campus bookshop to obtain a refill for it. The ladies behind the counter, charmed as everyone always was, organised him one. He thanked them, paused for a moment' s thought, then said that while he was there he ought to get a second refill for his pen as well. It is clear that by purchasing two refills for his pen, he was looking forward. Unfortunately fate decreed otherwise and he passed away only a day or so later.

There exists in the George Forbes Memorial Library in Ivey Hall the Kawase Collection. It is made up of several gifts of books and manuscripts given to the Library by Dr Kawase over a number of years. The books include titles on Japanese wild grasslands, pastures and pastoral farming, and his well-known New Zealand guide book for Japanese visitors. There are also two manuscript copies of his memoirs. In 1938 Dr Kawase sent out to his old College copies of the first two scientific bulletins produced by the Kawase Grass Farming Research Institute. It is a unique collection and we are delighted to hold it.

This gathering today, with its wide range of people associated with Dr Kawase will add to the legend of the man. We had the plaque celebrating his life ready for placement in Memorial Hall – a building he would have known well in his days as a student. Unfortunately, as you will be

aware, Memorial Hall was seriously damaged in our recent earthquake and is not at the moment able to be used.

Nature upset our plans! It is significant and relevant to recognise that Dr Kawase came from a culture deeply respectful of nature and its forces. One cannot therefore resist the feeling that he would have fully appreciated our predicament of not having Memorial Hall currently available to receive his plaque. However, these circumstances in no way diminish the importance and significance of this occasion.

The organisation of this celebration and the production of the plaque owe a great deal to Dr Kawase's family and the current President of the New Zealand Society of Japan, Makoto Kurehashi, Mak, to his many New Zealand friends. Mak and the Society have shown great generosity in presenting the University with a significant financial contribution towards the restoration of Memorial Hall. On behalf of the University I acknowledge this generosity and gesture and note that it undoubtedly reflects what Dr Kawase would have been thinking, had he been with us.

Thank you all for attending and honouring the distinguished Lincoln University alumnus Dr Isamu Kawase.

川瀬勇親族代表 藤村琇子さんのスピーチ

今回 父の銘板をリンカーン大学に置いて頂くとの話を耳にした時には大変驚きました。11年と云う歳月が経っている今、未だ父を覚えてそのような企画をして下さるとは何と有難い事でしょう。ご尽力頂いた皆様に御礼申し上げます。

当日の様子は他の方々と重複するでしょうから私は式典で申し上げたご挨拶をここに述べさせていただきます。

Prof. Fieldをはじめリンカーン大学の皆様並びに本日ここにお集まりの方々、そして今は亡きドン・クラブ氏に心から感謝申し上げます。当地に来てクライストチャーチを襲った地震の後、早くも復興している町の姿にNZの逞しさ、勇気を感じ地震国日本から来た私共の良き学びの時となりました。

この度、父の銘板をこの伝統ある大学に置いて頂ける事に深く感謝いたします。彼は今から80年ほど前に日本人として最初の留学生となりましたが当時の日本ではこの美しいNZは未だ知られていない時代でした。父はここで牧草学を学び、帰国後は国内の牧草の普及に尽力致しました。

私はNZに来て沢山の温かく親切な方々と出会い、父が生涯NZに魅せられこの地を恋しがっていた気持ちを理解致しました。父はこんなに素晴らしいリンカーン大学で学んだのです。皆様もご存じのように彼はこの地で人生を閉じました。

今も父の魂はこの美しいクライストチャーチの大学、山や丘、そして川や草地を楽しんでいることでしょう。

この場で父に代わって皆様方に心より御礼申し上げます。誠に有難う御座いました。

会長 呉橋真人のスピーチ

ロジャー・フィールド、リンカーン大学学長、河合祥一在クライストチャーチ日本領事、ディステイングィシト・ゲスツ、レディーズ&ジェントルメン、本日は除幕式にお越し下さいましてありがとうございます。「リンカーンの息子」とあえて呼ばせて頂くDr. 川瀬のまさにこの学び舎で、Dr. 川瀬についてスピーチ出来ることはこのうえない光栄です。

午前中スピーチの原稿を書いていたのですが、まだ完成していません。とても緊張しています。ワインを2杯頂きましたがそれでもまだ…。(笑)

今からちょうど79年前、1931年の10月にDr. 川瀬はリンカーンに、当時はカンタベリー農科大学に、日本人初のニュージーランドへの留学生として入学しました。

私はDr. 川瀬が彼の第二の故郷であるクライストチャーチで最期の日を迎えるまでの約20年の知己を得ました。Dr. 川瀬はニュージーランドについて語ることがお好きで、いつもニュージーランドは人類のユートピアであると言っていました。そしてその実例として、いくつかの楽しいストーリーをお話しされました。

初めてニュージーランドに来たとき、最初に驚いたのはトイレトペーパーの品質でした。(笑)当時の日本では新聞紙をトイレトペーパーとして使っていたので、ニュージーランドのとてもやわらかくて、白いトイレトペーパーにびっくりしました。二番目に驚いたのはトーストにパンよりも厚くバターを塗るニュージーランドの朝食でした。三番目は、Dr. 川瀬は敬虔なクリスチャンで、

これは代々続く川瀬家の伝統でした。旧約聖書では「約束の地カナン」には乳と蜜が流れる、とあり、彼はミルクと蜂蜜が豊富に溢れるニュージーランドこそが「約束の地」であること発見したのです。ニュージーランドがユートピアである、と言うのはこれが第一の理由でした。彼は日本で初めてのニュージーランドについて書かれた本を上梓しますが、この本の副題が「南の理想郷」でした。

1959年に彼は東京で、日本で最初の日本ニュージーランド協会を立ち上げました。そして、関西、関西というのは大阪近辺の地域をいいますが、その関西支部をニュージーランドパピリオンがとても人気だった大阪万博の年、1970年に創立しました。まことに失礼ではありますが…日本人がニュージーランドとニューギニアは違う国と認識した年でした。

彼は楽観的(happyな)人物で、いつもジェントルで親切で愉快でした。しかし特に彼の前半生は、当時の多くの日本人と同様に、戦争にさいなまれました。

1931年彼が神戸から出港して間もなく満州事変が起きました。中国との15年戦争の扉を開いた事件でした。翌年には日本は傀儡国家満州国を樹立、その翌年には日本の中国侵略を非難した国際連合を脱退しました。彼の留学時代は、現在の日本ニュージーランド関係とは全く違う困難の時期だったことを指摘したいと思います。

当時ニュージーランドはもちろん反ナチ、反日本でした。しかし、日本への憎しみが増す中、愛すべき日本人、Dr. 川瀬がニュージーランドにいたことはいくぶんかの救いだったのではないのでしょうか。

彼は日本を「乳と蜜の流れる」国にしたいという大きな夢を抱いていました。しかし時代は彼に寛容(親切)ではありませんでした。

いずれにせよ彼はリンカーン大学の卒業生であることを生涯誇りに思い、常にリンカーン大学は世界でベストの大学であると言っていました。

式典出席会員の感想

式典に出席して

事務局長 桑原 耕治

Dr 川瀬は私にとって伝説の人です。その人柄について様々な逸話を聞いています。「本当は廻

らない寿司が好きなんですが、川瀬先生(ご自分のこと)は貧乏だから廻る寿司しか食べさせてあげられないんです。」これはこれまでたくさん聞いたDr 川瀬の逸話の中で私が一番好きなものです。

心から自分に素直で、他人に寛大な人と会える事はなかなかありません。また、沢山の人の人に損得なしで敬愛される人にもなかなか会えません。私は、35年間のサラリーマン人生で知った数千人という人の中にこうした人は一人もいなかったのじゃないかと思います。

しかし、NZ人の心映えとキリスト教の考え方がわかってくると、Dr 川瀬のような方が出来上がっても不思議はないと、この頃、思うようになりました。

わが身を振り返ると、「この世は欺瞞に満ちている」との確信とともに、その世を斜め(あるいは裏側)からしか見られなくなっている自分に気づきます。今更、人生をやり直すわけにはゆきませんが、NZの人たちとの交わりを進め、キリスト教についての知識を増やしてゆけば、ひょっとしてDr 川瀬の心境に近付けるかもしれないなと思っています。

今回の式典に参加して、「神様にその身を委ねて、あれこれ考えることなく、導かれるままに自然にふるまった」と思われるDr 川瀬の生き方を、これからの私の人生の指針にしたいと思っています。

クライストチャーチでの行事に出席して

理事 石井 久行

9月4日にカンタベリー地域で発生した地震の影響で現地例会と川瀬勇創立者の記念銘板序幕式の延期が一時は懸念されましたが、地震の被害がある程度で収まったのと両国の関係者の尽力で当初の予定通り10月19日と20日に開催されましたことに感謝の念を抱きました。全ては川瀬博士の80年ほど前の留学が始まりでした。春が訪れたクライストチャーチでの2つの行事は草の根の交流に相応しい雰囲気の中で開催されました。本年、当協会は創立40周年を迎えていますが、川瀬博士が蒔かれた一粒の種をカウリの樹のように今後立派に育てていくのが私たちの務めと思いました。

カンタベリー大学にて

会員 藤村剛

ニュージーランドを訪れたのは、今回が2回目でした。初回は大学3年生の春休みだったと思います。初めて着陸したクライストチャーチ空港は、空港というよりは、巨大な草原のような所だったように記憶していたのですが、今回着陸した空港は、当時よりかなり近代化したような気がしました。およそ20年経ったわけですから、きっといろいろな変化があったのだと思う一方で、自分の記憶が確かなものなのかどうか怪しいものだ、とも思いながら私の旅はスタートしました。

初めてのニュージーランド旅行は祖父の案内、私の運転で、カンタベリーをぐるぐると車で回りました。もちろん祖父の大学も一緒に見て回ったので、図書館が寄宿舎であった事や当時の暮らしぶり等は、その時に祖父から聞かされていました。

私の曖昧な記憶の中では、見上げた窓が時計台の右側だったのか左側だったのか、定かではないのですが、祖父は彼が学生時代に過ごしたその部屋の窓を指差し、当時の思い出と一緒に私にあれこれ話をしてくれました。細かい話は、残念ながら、ほとんど忘れてしまいましたが、いつもの口調で、でも懐かしそうに、嬉しそうに語った祖父と過ごした時間は今でも私の宝物です。

あれからおよそ20年。祖父がその人生を終えた地を再び訪れて、その足跡をたどる旅を家族や、祖父を慕って下さる皆様とともにできた事は私にとってとても意味のある経験でした。大学での式典では、私の知らない川瀬勇の姿を写真で見たり、古い記事の中に、私の知っている歯に衣着せぬ物言いをする祖父の若き日の大胆な姿を見つける事ができました。祖父が何を考えこの地を選び、何を思いこの地で暮らし、学び、経験したのか。古い写真を眺めながら、皆様の話を聞きながら、家族と構内を歩きながらそんな事を考えていました。「理想郷」と祖父は、この地を呼び、遠くはなれた日本から忘れる事なく常に思いを寄せ、機会を見つけては帰郷し、とうとう最後はこの地で天に帰って行きました。ここが彼の運命の地であったのだ。今回の訪問で、祖父の见えない足跡を辿りながら、それを再確認できました。

いつの日か、私なりに、自身の目でニュージーランドの良さをもっと色々を探してみたいと思うのですがそのためには、かなりの回数通わなければならないはずです。あと数回の訪問では祖父の足跡を辿る事にして、私のチャレンジは老後の楽しみにしておく事にしたいと思います。

紀行集

今回の記念行事は現地集合、現地解散で行われ、出席者はそれぞれに NZ の旅を楽しみました。

た。そんな旅の紀行文を以下にご紹介します。

11年ぶりのニュージーランド

藤村健

11年ぶりのニュージーランドは、快く僕を受け入れてくれた。快適な気候、空一面の青空、そびえ立つ山々、そして果てしない草原…。町の開発は進めども感覚は祖父と降りたったあの日と同じだった。

今回の式典開催にあたり最初に行こうと言いだしたのは妻、智子だった。彼女は未だ訪れた事のない南の理想郷に会った事のない義祖父を重ね、家族で行く夢を見ていた。三歳の長女朋香（ほのか）、0歳の長男倫太郎を連れての初めての海外旅行に当初全く関心を示さなかった僕の心を開いてくれた。というのも、11年前に祖父を目の前で亡くして以来、心のどこかでNZ行きを避けていた。「新婚旅行は絶対NZに！！」との思いも11年前のあの日以来、すっかり殻に閉じこもったまま出てはこなかった。今から考えると、あの瞬間の出来事を思い出すのが怖かったのだと思う。

結局、出発前夜に朋香がウイルス性の病気にかかり僕だけが行くことになったのだが、前述していたような不安は到着と同時にかき消され、逆に素晴らしい思い出に塗り替えられた。今は、「次回は必ず家族一緒に」との想いに駆られウズウズしている。

さて、除幕式については、母親、姉や兄が寄稿をしているかと思うので、私は旅の印象などについて書かせて頂くことにした。三十を超えての家族水いらず（藤村 family）の旅も悪くない。兄弟がこの年になっても仲良く？旅が出来る環境を与えてくれた両親には感謝をしているし、自分の子どもたちにもこうであって欲しいと心底思う。などと、普段は全く考えないような事を、NZの大地は考えさせてくれた。

クライストチャーチからマウントクックへ向かう間の延々と続く牧草地帯は祖父が過ごした時代と、さほど変わらない光景だったのではないだろうか。途中2泊したテカポでは湖に映る幻想的な月を見ながら夜空に南十字星を探し、草むらで走り回るウサギを追いかけた。日本ではなかなか出来ない時間の使い方だった。圧巻だったのはマウントクックで見た氷河と氷河湖。ご承知の通り日本には氷河が無い。以前、ヒマラヤ山脈で氷河や氷河湖を見た事はあったが、氷塊が湖に崩れ落ちる音が周りの山々に響き渡るのを生で聞いたのは今回が初めてだった。大自然を手つかずのまま残し、自然環境の保護を国の根幹と位置付け管理するNZはやはり素晴らしい国だと実感した。旅の

思い出は風化するが、風化するたびに NZ を訪れ、祖父と旅した記憶を思い出していきたい。

最後に、祖父の言葉で文章を締めくくりたい。祖父は生前中「私は NZ で牧場を経営するのが夢なんです。実現したら、あんととター（兄の剛）はレストランで働けるように雇ってあげましょう。あとの人たちはうるさいですよって…」と、笑いながら話をしていた。良くも悪くも祖父らしい言葉だ。そして、「私は少しは偉いんですよ。死んだら分かります」と言った言葉の意味がまた一つ分かった旅でもありました。

旅行の感想

石井 久行

友人の井上君は初めて、私は3回目のNZ旅行でした。2つの行事終了後の10月21日からレンタカーでマウント・クック、クイーンズタウン、ミルフォード・サウンド、アロータウン、ダニーデン、オマルーを経て再びクライストチャーチへ。列車に乗り換えピクトンまで。フェリーでウエリントンへ。再びレンタカーでヘイスティング、ネイピア、タウポ、タウマルヌイ、ロトルア、ケンブリッジ、ハミルトン、オークランドへ。関空には11月4日の朝に着陸。18日間の旅行中、ワイパーを使用したのは2時間程度、天候に恵まれた旅でした。宿泊は、YH・B&B・モーテル・リゾートホテルなど様々なところで。各地では観光名所と呼ばれるところは一応見物しました。観光地でないタウマルヌイへ立ち寄ったのは、来年1月に彼の地の高校生が来日するのでどんなところで興味を持ったからです。農業・牧畜の町でノンビリしたところでした。また、ヘイスティングの大沢ワイナリーは、出発前から見学をお願いしていました。歴史は浅いですが、ワインは既に高い評価を得ています。お土産に美味しいワインをいただきました。南島と北島の緑の自然の中を3500キロほど走行。途中パンクと21キロのスピード違反がそれぞれ1回（ポリスと私のマイカーが同じ車種で話が弾み警告のみ）。クルマで通り過ぎた小さな町にも必ず出征兵士の追悼碑が建てられていたことが印象に残りました。英国に忠誠を誓った証でしょう。NZは、日本でいえば江戸時代末から本格的に開拓が始まり、大自然の森が農地と牧場に開墾された経緯から今では自然環境保護に力をいれている様子を実感しました。今回の旅でも新しい出会いがあり、互いにメール交換の約束をしたところ帰国後直ぐ数名からのメールが届きました。次回機会があれば2ヶ月ほど滞在して日本語ボランティアとゴルフをしてノンビリしたいと思いました。最近ではアジアからの移民も少しは制限されたそうで

すが、都市に集中していろいろな問題もあるそうです。来年開催されるラグビーのワールドカップを国を挙げて新しい飛躍の機会にしようとしているようでした。美しい自然と素朴な人々の国、NZと日本との関係が更に発展することを祈ります。

NZ イメージの激変

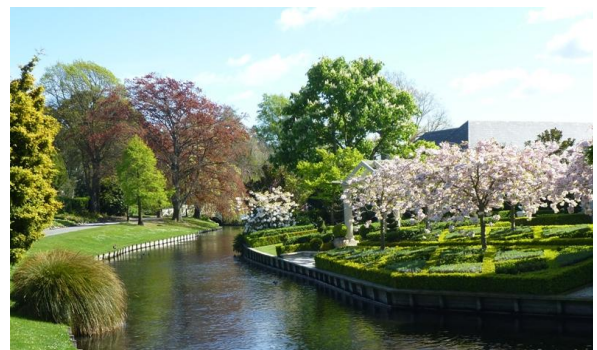
自称画家

桑原 耕治

今だから白状しますが、本当はニュージーランドへ行きたくなかったのです。私は飛行機のあの閉じられた空間にいますと、突然逃げ場のない恐怖に襲われることがあり、それ以来、よほどのことが無い限り、長時間の飛行はしないと心の底から誓っていたのです。しかし、除幕式には事務局としては行かざるを得ないと覚悟を決め、8月早々にはチケットも手配しました。9月下旬になり、日が迫ってくると再び「怖いなー」という気持ちが頭を持ち上げてきて、「できることなら欠席したい」と思うようになりました。呉橋さんから「大阪・成田間が依然キャンセル待ちになっており、全旅程はペンディング状態になっている」と聞いたとき、「やった～、これぞ天の采配、チケットが取れないことを理由に行かないで済むぞ！」と正直思ったものです。しかし、そんな願いもむなしく、呉橋さんがばっちりチケットを手配してくださったので、結局、恐怖のオークランド行き飛行機に乗らざるをえませんでした。

このとき、この旅行がNZに対する私のイメージに激変をもたらすとは思いませんでした。

幸い何事もなく、クライストチャーチに着き、春真っ盛りエボン河畔をたっぷり散策しました。下の写真はその時撮った一枚です。



この上ない綺麗さに感心はしたものの、結局は作られた美しさに過ぎないから、親しみを感じません。自称画家としては絵を画く気になりません。つまり、私にとってニュージーランドは美しいけど、ただそれだけという代表例がこの写真なのです。感動が無い。なぜか？理由はそこに住んでいる人たちの心が見えてこないからではないかと思

っています。この庭の持ち主はどんな人か？やさしい心を持った人か？それとも見栄っ張りな金持ちに過ぎないのか？

本筋に戻りましょう。ドクター川瀬のセレモニーに出席したことによって私はたくさんのNZ人を知りました。まず、一人さみしく到着したクライストチャーチでバッジさん（牧草牛のジョン・ハンドルビーさんのおかあさん）の温かい思いやりに満ちた人柄に接しました。はじめて知り合ったとは思えない喜びと安らぎと思いやりの中でホームステイができました。第223回例会では、特にカンタベリー大学の方々の飾らない親しみに満ちた人柄やスピーチに接することができました。ハンドルビー一家のヒューム夫妻にもその社会的地位の高さを感じさせない人柄に感心しました。NZの人たちは素敵な人たちだとは思いましたが、ほとんどは呉橋さんが選んだ人達だから、NZ全体にはあてはまらないと思っていました。

一連の行事が終わり、一人旅を始めると、次々に様々な人たちに接します。特急オーバーランダーの座席で隣り合わせになり、自分は何度も乗っているからといって窓側の席を譲ってくれたおばさん。何を見ればよいか、何時その場所は来るかを熱心に教えてくれました。ニューブリマスから観光に来ていた老夫婦と利発な孫連れは、私を休憩所の食事誘ってくれ、スナックなどを盛んに勧めてくれました。急カーブをぶっ飛ばす長距離バスにひどく車酔いしていた私は、とても口をつけられず申し訳ないことをしました。きわめつけはタウマルヌイで牧場を営むダンカン一家です。彼らは私のNZ人に対する先入観を吹き飛ばす生き方（自分を決して飾らないなど）を教えてくれました。街を歩いていた時、書類をいっぱい抱えた老婦人に会い、Mr. ダンカンが私を紹介してくれました。よくわからないまま握手しましたが、後で彼女が市長さんだと知ってびっくりしました。

最後に訪問したタウランガのボイック一家とは心から旧交を温めることがきました。亭主のレックスが、寝る前、唐突に「来てくれてありがとう」とこっそり言ってくれた時、嬉しさがこみ上げてきました。

だんだんNZ人に対するイメージが出来上がってくるとNZの風景と人とのかわりが見えてくるようになり、美しいだけの国ではなくなってきました。こうしてNZが好きになりだすと、常々、リタイア後の人生を何かの役に立てたいと思っている私としては、NZで何か役に立てることはないかなと考えるようになりました。タウマルヌイ高校で数学とか物理の先生が不足してい

るらしいのです。これならできるかもしれません。思いがけず、今後の人生を大きく変えるかもしれない機会に出くわしたのは、「フィリピンへの支援は私には無理だから、もっと簡単なNZにした方がいいんじゃない？」という川瀬先生のお導きかもしれないなと思っております。

11年振りのニュージーランド

林 園子

今回は私(園子)と妹(弘子)にとっては、1999年の川瀬先生がクライストチャーチで亡くなられた時以来です。11年振りのニュージーランド訪問となりました。

今回の私と妹との旅行の目的は、

- ① 川瀬先生のリンカーン大学のセレモニーに参加すること。
- ② 1990年からのクライストチャーチでのジャパン・フェスティバルで お世話になったグラハム・一和子さんにお目にかかる事。

さて今回の旅行は10月19日早朝にオークランド空港に着きましたがクライストチャーチ行きの国内線の出発が3時間半近く遅れとなるいきなりアクシデントに見舞われるということから始まりました。オークランド空港でお茶を飲み、読書、睡眠、空港見学(?)で過ごしました。まわりを見ていると騒ぐでもなく皆優雅に時間を過ごしていました。しかも、クライストチャーチに着く直前に機長から「クライストチャーチで地震があり空港に被害があれば ウェリントンへ行きます」とのアナウンスが入ったようですが幸いクライストチャーチへ着陸できました。

9月4日早朝に大地震があつて余震が続いているとのことで心配しながら空港から街中へ入りましたが、地震があつたのかと思うほど花などが満開で素晴らしい景色でした。でもやはり街中では一部道路が盛り上がり、レンガの屋根が落ちたりしていました。

先に呉橋さんと桑原さんがお世話なるお宅に立ち寄りましたが大変チャーミングなご婦人（先般牧草牛の話をしてくれたハンドルビーさんのお母さん）が出てこられました。

ホテルにチェックイン後、大急ぎでカンタベリー博物館へ行き、スコットの南極探検の展示や白瀬中尉の展示を見学しました。博物館の周りの公園も花が満開で素晴らしかったです。

夜はホテルでの例会があり 私たちのテーブル

はニュージーランドの倉敷協会の方3人と一緒に大変楽しい夕食会でした。

20日朝、ホテルで朝食を食べていたら妹が生前の川瀬先生が朝食を食べていたテーブル席にお孫さんの藤村健さんが座っていると言って懐かしがっていました。

午後から川瀬先生の銘板除幕式セレモニーに出席のためリンカーン大学に行きました。図書館の見学ここでは川瀬先生の書籍等がガラスケースに収められていました。書籍はバーコード処理をされ本棚に納められていました。私も一時会社のライブラリーの担当をしていたのでなつかしい気がしました。多くの海外留学生が来ていて図書館を利用していました。その後 買い物や食堂でのお茶会がありセレモニーに移りました。

セレモニーでは其のバックに川瀬先生の若かりし頃の写真やフェスティバル・オブ・ジャパンが映しだされていました。私事ですが私が写した写真が使われてびっくりしました。

行天さんの妹さんが 40 周年のシールを貼ったナイロン袋にいれた日本手ぬぐいをたくさん用意をしてくださり現地のゲストだけでなく私たち参加者も頂きました。

夜はハンドルビーさんの妹さんの Sue さんのお宅へお邪魔して夕食を頂きましたがお庭もお宅も食事大変素晴らしかったです。お嬢さんの一人は陸軍中尉さんということで驚きました。

21日は朝一番に石井さんが泊まっていたウィンザーホテルで以前こちらにいたダイアンと再会し、10時半からは2番目の目的の一和子さんに会うために彼女が今住んでいるリタイヤホームへ行きました。この件では 加島さんに大変お世話になりました（この方もフェスティバル・オブ・ジャパンでお世話になりました）。

一和子さんが今住んでいるホームは日本です思っていたようなホームではありませんでした。門を入るとお花が満開で4軒ほど連なっている家屋やそのほかに玄関を入るとホールがあり、食堂や美容室があり、其の奥に名前の掛かったワンルームの部屋が連なる棟がある建物があり、其のうちの一部屋に一和子さんが居られました。

一時間ほどお邪魔して失礼したのですが 其のとき一和子さんが加島さんのピアノが聞きたいと言われたのです。加島さんは事務所の許可を貰わないで勝手には弾けないと言われていたのですが、帰り際にホールにあったピアノを試し弾きされ、すぐに事務所に申し込みに行つて

くださり日時を決めて下さったようです。

私と妹は買い物をしやすいところで下車させて頂いたのですが、途中で霰混じりのすごい雨に遭い、私がコートを着た途端に妹が自分の物を忘れたことに気づきホテルの前からタクシーに乗り、一和子さんのリタイヤホームへ戻りました。

午後からは買い物タイムにしてクライストチャーチの街を散策しました。今回も大黒という日本食の店に行つたのですが 何か味が落ちているような気がしました（妹も同意見でした）。

22日は帰国する日でしたが、帰国便が夜中ということでオークランドからカウリの木を見に行くツアーを頼んでいたので 午前2時半起きで3時半過ぎに朝食バスケットを持ってホテルを出て5時30分の飛行機でクライストチャーチを発ちました。

8時頃にオークランドから数時間掛けてカウリミュージアムへ。ここではカオリの木をどのように使用したか、カウリから琥珀が採れる（木が傷ついたり、枝を落としたりしたら（カウリは自身自身で要らない枝を落とします）液を出して自身自身を保護する）ので、それに目をつけた白人たちが伐採をしたり、木材が硬く、きれいなので家具を作るため伐採されるようになりました。

其のそばにあるBアンドBのレストランで食事をしましたが、この一家は大変日本最良なのだそうです。

そこから1時間くらいでカウリの森へ到着、先に1時間30分（案内には1時間と書いてありました）ぐらいかけてカウリの森をハイキングして色々なカウリを見たり巨大なゼンマイを見たりしました（原始の戻ったような気分になります）。

この森の入口に注意書きがありましたが其の中には日本語もありました。其の注意書きには 犬やペットは禁止と書いてあるのになぜか帰り道に私たちの前を犬が横切っていきました。出口の係官にそのことを告げると 野豚を捕まえるために猟師が放した犬が間違つてこの森に入ったとのことで捜査しているとのことでした。

その後 カウリの木の代表であるタネマフタを見学にいきました。（日本の屋久島の縄文杉と姉妹木の提携をしています）

余談ですが 日本の旅行社でこの場所でお茶会をするツアーを設けているところがあるようですがそのようなことはせずに静かに見ているほうが良いかと思います。

宵闇迫る頃にオークランドに到着しましたが、

この日は週末ということで道路の反対側車線は車が渋滞していました。深夜 オークランド空港から関西空港へ向けて飛び立ちましたが 途中 怖いほど揺れました。そして、なんと、関西空港では 私のトランクケースが壊れてできました（航空会社持ちで修理完了）。

しかし 私たちが無事帰国できたので良しとします。この旅でまた少し海外旅行への行きたい虫がでてきそうです。

今年、二度目のニュージーランドへの旅

行天幸子

今回は、現地例会とリンカーン大学での Dr 川瀬勇記念銘板序幕式に出席でき、感動と緊張でした。クライストチャーチは前月、M7.1 の地震に見舞われ、大学のメモリアルホールも相当な被害を受けました。市内の建物も危険になっている箇所、メインストリートも一部通行止めの箇所がありまだ余震もある中での行事でした。

その後は、いつものように予定を組まない、気ままなニュージーランドの旅のスタートとなりました。中でも今回は初めての地、小さな町アカロアへ。クライストチャーチから車で 1 時間半ほど。フランス系の面影が町のいたるところに残っており地元の人からも人気のエリアで、海と山が迫る絶景です。

事前に日入時間、月出の時間、月齢を調べておいてびったり満月の 22 日にアカロアのヒルトップ上る計画ひそかに立て、予定通り（実は道に迷ってついに行く手がなくなったためにポリスのお手伝いと偶然が重なり、びったりの時刻に頂上に立つ事に成功）、運良く最高のサンセットが水平線の彼方に沈んでいくところを山の頂上から見下ろすことができました。その瞬間 180 度振り返れば、東から今までに見たことのない雄大な月が昇りはじめ、感動のあまり言葉もなく、震えるばかりの一時をすごしました。これは何度も通った中でも最高の自然のプレゼントでした。そしてその日の宿は 9 万エーカーの農地を所有するファーム。主人が迷った私達をその頂上まで迎えに来てくれました。彼らにとっては遅い夕食となりましたがとても愉しく、美味しいワインとおしゃべり、おもてなしに改めてこみ上げるものを感じました。耳を澄ませば自然の風の作り出す音、どこからとなく香る草、遠くでママを探すラムの声。月明かりにまかせて幻想な光景に酔いました。ベツトルームも調度品もオーナーの趣味がよく手入れも行き届いており南フランスを思いださせる、アンティークなレイアウトとなっていました。窓から見

えるところは桜が満開となり、庭には、夫人が長年にわたり丹精こめて作り上げた薔薇も何十種類、たくさんの種類のハーブ、草花などが美しく咲き誇って、プールもあり夏になると満点の星のもとで泳ぐもよし。滞在が短すぎたのが少し残念でした。

いつ、何度も行っても、季節が違いルート違えば別世界。自然は一期一会で楽しませてくれます。

第 223 例会（クライストチャーチ）出席者

藤村琇子、藤村絵里、藤村剛、藤村健、高杉垣生、高杉智子夫妻 石井久行、井上佳久、行天茂夫、行天幸子夫妻、大西節子、林園子、林弘子姉妹、桑原耕治、呉橋真人

Professor RogerField,vice Chancellor, Lincoln University With Mrs Carolyn Field

Ms Robyn Byrne, Executive officer ,vice Chancellor's office, Lincoln University

Ms Sarah Currie, Alumni Manager,Lincoln University

Ms Jan Latham, Conference &Eventorganiser, Lincoln University

Mr Errol Costello, Lincoln University

Ms Lesley Collsel, General Manager, Museum Programmes, Canterbury Museum

Ms Natalie Cadenhead, Curator, Antarctic Department, Canterbury Museum

Mr Baden Norris, Curatoror Antarctic Exploration History with his partner Ms Thelma Sinclair

Mr Newton Dodge, Kurashiki Sister City Committee

Ms Cheryl Thome, Kurashiki Sister City Committee

Mr Malcom Harris, Kurashiki Sister City Committee

Ms Budge Hundleby, Ex－Festival of Japan Committee

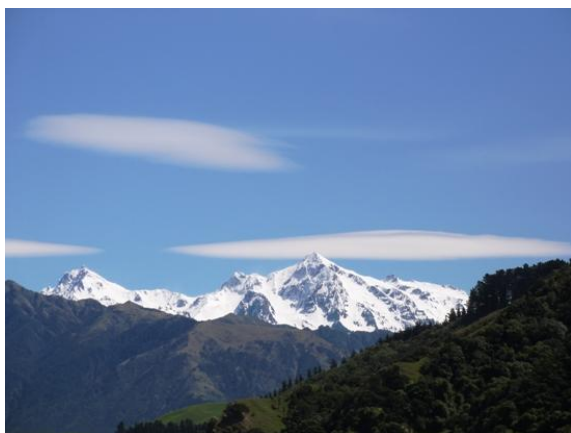
Mr&Mrs Steve&SueHume, Principal,AvonsideGirls' High School



NZ と言えば これですね。



ピクトンの夜明け



カイコウラからの眺め



偶然出会った SL



ブレナムからピクトン方向



このヘリで雪山へ登頂！



マオリショー



クイーンズタウン



オークランド 春のイチゴ祭り



地震の被害を受けたクライストチャーチの建物



氷河湖



テカポ湖を見下ろす高台



NZ 名物の巨大ぜんまい（ファーン）



巨大なカウリの樹（タネマフタ）

人が見えますか？



一和子さんとリタイアハウスの前で記念撮影



おいしかったミートパイ



大盛りのデザート（3人分）



クライストチャーチのバッジさんと記念写真



ファームステイでお世話になったダンカン一家



馬に乗って牛や羊を追いました。



ボーイック夫妻と2年ぶりの再会



特急トランツアルパインからの眺め



特急オーバーランダーからの眺め